



News Letter No. 17

今回は 2023 年 8 月 12 日（土）～13 日（日）に行われた DC/TMD 認定セミナーについて、愛知医科大学疼痛緩和外科・いたみセンターの西須大徳先生に報告していただきます。

「DC/TMD 認定セミナー-2023」報告

2023 年 8 月 12 日（土）～13 日開催（日本大学松戸歯学部 MD ホール／教育実習棟臨床実習室）

2023 年 8 月 12 日・13 日と 2 日間にわたって実施された、DC/TMD 認定セミナーに参加させていただいた。私の参加した理由は、臨床・研究の両面で認定が必要であり、Certification をいただくことだけを目的としたものであった。しかし、修了してこのレポートを作成している今、その思いは一蹴されている。

申し込みをしてみます驚いたのは、事務局の参加者への手厚い配慮である。事前にセミナー資料とともに、参加にあたっての学習事項、注意事項などの詳細な連絡を定期的にいただいた。日頃多数のメールをやり取りする方々も多いと思われるが、資料つきのメールはとにかく探すのが面倒である。その点、時間をおいて数回にわたり連絡をいただけたことで、リマインドだけでなく、資料へのアクセスが手軽であったことがとても助けられた。また、資料には、修了するのに必要な「コマンド」が抜粋されたワードファイルも含まれており、暗記をするに際し非常に役立った。（ただし怠慢な筆者は事前学習を怠り、泣き目を見る結果となったのは別の話である。）

セミナーは両日とも 9～17 時で予定され、DC/TMD の全てを網羅した、まさに DC/TMD 漬けであった。まずは、小見山 道教授（日本大学松戸歯学部）による概略的な話があった。本セミナーは、コロナ禍で休止していたこともあり、実に 2 年ぶりの開催であった。それは、いわずもがな、「ハンズオン」でなければならないからである。本邦では 3 回目であったが、INFORM の日本支部が 2021 年に設立されたことで、今回はじめて日本語かつ日本語講師のみで実施され、参加しやすい環境であったと感じた。また、DC/TMD は「顎関節症および関連頭痛」を診断するためのツールであり、他の疾患（非歯原性歯痛など）を含むものでない、ということの説明があった。また、正しい手順を踏むことで確実な診断へとつながるものであるため、コマンドや手技は、歯学教育の OSCE のように、忠実に実施することを強調され、それができていない場合、認定されないケースもあるという、大変に重い言葉をいただいた。



その後、講義形式で DC/TMD を構成する Axis I / II について、それぞれ島田明子教授（大阪歯科大学）、築山能大教授（九州大学大学院歯学研究院）より話があった。Axis I では診断決定樹・診査表の一つ一つについて、意味合いと手順の丁寧な説明があるとともに、どこをポイントとして進めていくか、そのポイントを押さえながら診査時間を短くするにはどのような方法があるか、などのアドバンスな説明もあり、大変勉強になった。



さらに Axis II では、診査を進めるにあたって、留意すべき精神疾患とその特徴、またそれに応じた質問紙についての話があった。そして、あくまで顎関節症リスク因子の評価と疾患の「傾向」をみるために実施するものであり、その結果が精神疾患の診断につながるものではないことを強調されていた。その上で、精神科や心療内科との介入が必要になる場合には、「連携」することが重要であることをお話しいただいた。



講義を経て、いよいよ実習である。まずは島田講師による実際の手順・コマンド・検査のポイントが示され、その後、1チーム 2-3 名に対し、講師 1 人という贅沢な相互実習にうつった。その中では、特にコマンドの忠実性と触診に重点が置かれていた。グループでは実際に診査を進めながら、一つ一つのコマンドの言い回しが選ばれている理由や、個々の手技の注意点など、時には担当講師が実践していただいたことで、知識と手技を深めることができた。特に、筋触診については、圧力を一定にするため「パルピーター[®]」を用いた厳密な検査手技が求められた。ここで重要なのは、DC/TMD による筋触診は「顎関節症診断」に必要な検査であり、例えば非歯原性歯痛における「筋・筋膜性歯痛診断」とは別物であるという点である。そこを十分理解し、目的に応じた診査法の選択が重要であることを学ぶことができ、改めて DC/TMD の精密さを痛感した。



最後には、模擬患者を用いた実習、という名の実技試験が実施された。それぞれの受講者が覚えたことを緊張感の中でも十分に発揮しているなかで、私自身、実に 10 年以上ぶりに試験の怖さを思い知った次第である。試験官の温情か、なんとか初回で合格をもらえて安堵したのは言うまでもない。最終的に今期の受講者は全員合格の運びとなった。



セミナーの中では、複雑な顎関節症を DC/TMD により診断していくケースプレゼンテーションや、SUNSTAR 社主催のランチョンセミナーもあり、顎関節症を学ぶものにとって大変有意義な時間であったと思う。そして何より、2 日間に渡って DC/TMD を学ぶことで、専門医でなくても顎関節症を正しく診ることができるようになる、という真髄に触れることができた。今回、言語的なハードルが下がったことで、このスキルが日本全国に拡散し、アゴの症状で困っている患者さんへの正しい医療提供つながることを期待している。

最後に、このセミナーを開催してくださった INFORM の先生方ならびにスタッフの方々に深く御礼を申し上げて、私のレポートとさせていただきます。